

---

# 新浦島太郎と人魚姫

マロンマカロン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新浦島太郎と人魚姫

### 【Nコード】

N1032L

### 【作者名】

マロンマカロン

### 【あらすじ】

あたらしい話を考えてみました。まだ話をねってる段階ですが、投稿するのが初めてなのでみなさんの反応が試したいのでこれを出します。

(前書き)

新しいバージョンです

太郎は今で言うところの大学生ぐらいの年齢だった。

父親が漁師だったのでアルバイトとして毎朝つりをしたり、友達と海辺でサッカーしたりしていた。

寒い冬の終わり、今で言うところの2月の14日ごろ、海辺でこどもがカメをいじめているのをみつけた。

カメを助けるとカメは

「どうもありがとうございます。助けてくれたお礼に竜宮城でございまして差し上げます。酸素ボンベをつけて、背中におのりくださいませ。」と言って酸素ボンベを手渡した。

竜宮城についてみると、カメは美しい人魚に変身した。

そのカメはなんと、人魚姫だったのだ！

人魚姫は水の中から太郎を見て、イケメンで朝からまじめにバイトをしたりたのしそうにサッカーしている太郎に、あんな人にお婿に来てほしいなと恋をしていた。

仲良くなりたいたいと思い、こっそり魔魚と契約して「陸の上に出れる特製キャンデー」を売ってもらった。

年をとった魔魚は若くてぴちぴちでみんなにかわいいとおもわれている人魚姫が日ごろから妬ましかったので、人魚姫をカメにする魔法をかけた。

人魚姫はカメになつて驚いたものの、気を取り直してボンベを首にさげてなんとか陸に上がった。

しかし、にっちもさっちもいかずに、子供にいじめられてしまった太郎のよく現れる場所と時間にたどりつくように計算していたから助かったものの、危うかった。

竜宮城では人魚姫とその姉妹がちやほやしてくれた。

人魚たちは毎日海を泳いでいたのでみなボンキュッボンのナイスバディーでぴちぴちでセクシーだった。

ワカメを毎日食べていたためお肌のつやも良く、足が鱗なのが最初は見慣れなくてギョっとしたものの、海の生活になじまないで海よ（陸から来た人間がおちいりやすい頭がくらくらする状態）におちいった太郎に優しく介抱してくれた。

太郎には竜宮界では高級品である空気の補充された特別のVIPルームの寝室が与えられた。

竜宮王は娘と結婚してあとを継いでほしいと頼んだ。

一年目は人魚姫とドキドキしながら竜宮城の近所でカラオケをしたり、映画を見たり、人魚姫の手作りの料理を食べたりした。とても楽しかった。

二年目はウキウキしながら気分転換に竜宮レストランでシーフードを食べたり、竜宮カーでドライブしたり、竜宮ランドに行ったりした。

とてもおもしろかった。

しかしいくらかきれいに着飾った人魚姫でも3年目になるとテンションが下がってきた。

人魚姫は太郎が退屈そうにしているので飽きられたのではないかと心配になった。

そこでお父様におねだりしてきれいなお洋服をたくさん買ってもらうていた。

それでも飽きてきた。

人魚姫と結婚すると、ゆくゆくは竜宮王にならなくてはならない。

竜宮王は他の王族との付き合いや王としての儀式が忙しく、お金と地位と名誉はあるが、実質24時間勤務で非常に忙しい。

子供とはおちおち会話しているひまもない。

太郎は人魚姫との結婚を躊躇した。本当にこれでいいのだろうか。

人魚姫は結婚したら女王様になって家事はするかもしれないがそれも優秀な部下が手伝ってくれるし、3食昼寝付で、お昼にいいともも見えるのに、自分はエリートになれるかもしれないが自分の時間さえない。

ワークライフバランスがとれない。

実家に戻って漁師としての腕を磨いて、時には友達とサッカーしたり浜辺で子供に釣りを教えてやれるような生活のほうに性にあっているのではないだろうか。

なにより、外に出歩くのに酸素ボンベが必要不可欠で大変だ。

そこまでは3年いれば慣れたが、人魚姫と会話するのに、難しいことは通訳のものを解さなくてはならない。

それも大体の事は足りるかもしれないが、毎日シーフードばかりで日本食がなつかしい。

ごはんは気を使って陸上から輸入してくれているが、あまりおいしくない。

太郎はホームシックになった。

陸に戻って漁師になろう。

そのほうがやりがある。

それに俺は陸の上では曲がりなりとも長男だったから少しは土地もあるし、ゆくゆくは親の面倒を見なくてはならない。

人魚姫も長女だから年をとったら竜宮王のめんどろをみなくてはならないだろうが、長男長女の結婚はふたりとも両親の面倒をみなくてはならないのが厄介だな。

そこで、太郎は地上の父と母に結婚したこと報告するので、いったん水の上に返してほしいと竜宮王に頼んだ。

竜宮王は人魚姫がいいと言ったらいいだろうと答えた。

人魚姫は

「帰る前にお願ひがあります。我が国には自慢の美しい真珠がとれるパールエリアがあるのでこのところ人間界のごみのせいで真珠が減って困っています。人魚は人間界のものは怖がって触りたがらないのであなたがそうじてください。ごみがなくなったらお父様におねがいして陸までおくってもらいましょう。」

太郎はいわれるままに近くまで酸素ボンベを背をつてパールエリア

に行く、人間界のごみが底にたまっていたので、とりあえずパールエリアからは取り除いて海の中の洞窟のようになっていてるところにほうりこんでおいた。

それが終わると、人魚姫は「もう掃除が終わってしまったんですか？あなたはさすが人間ですねです。ついでにお隣の竜宮城に回覧板を渡してきてください。お隣ではあなたがうわさになってるんですよ。近所づきあいも大切にしてください。」と言った。

太郎は見知らぬ人と話すのは苦手だったが、隣国まで出張に行ってきた。めんどくさかったうえ隣国はかならずしも友好的とは思えなかったが、なんとか回覧板を渡してきた。

それが終わると、人魚姫は「もうすぐ私の誕生日でパーティするのにごちそうが必要なんです。あなたも漁に出て、いわしやサンマを100匹ほど釣ってきてください。あと、ついでに竜宮城の屋根がこの前の台風で壊れてしまったので適当に修理しておいてください。」と言った。

しかたないのでなんとか100匹ほど捕獲し、屋根にはちいさい穴が開いていたので釣った魚の中でまずそうなのを選んで刻んですり身にして魚のすり身を穴に押し込んで穴をふさいでおいた。その穴ははつきりいつてどうでもいいぐらい小さかった。

人魚姫は自分のことを竜宮界にとどめておきたくてくだらない日曜大工をたのんだのだろうか。

人魚姫の20歳誕生日パーティが行われた。

それは盛大であった。マグロのような大きな魚もたくさんあって、自分の釣ってきた100匹のサンマやいわしなどどうでもいいような存在感だった。

人魚姫は悲しそうに、

「いったん帰るのは仕方ありません。私が人魚であり、太郎に出会ったことは水の上では絶対に秘密にしてください。」

そして、

「万が一太郎が帰ってこれないことになったら心配なので、お守りに宝の入った玉手箱を差し上げます。万が一の時だけ、この玉手箱をあけてください。その時は中身はお土産としてさしあげます。」

けれども、どうか無事に帰ってきてください、あなたを世界一愛しています。

私はあなたの帰りをお待ちしています」  
と言った。

そして、新月の夜に人魚姫がまたカメになって浜辺で太郎に会いに行くことになった。

太郎は玉手箱をかかえて目隠しをされてカメになった人魚姫にまたがった。

はっと目が覚めると陸の上だった。どうやら泳ぎ疲れて寝ていたらしいが、わきにはちゃんと玉手箱があったので夢ではないと分かった。

しかしひさびさに太郎の実家に戻ってみると実家ではもう太郎は行方不明で死んだことになっていたうえ、弟が土地も受け継ぎ、漁師としても一人前になっていた。

弟には船の上で嵐に会ったため、無人島に着陸したが、船を直すのに3年かかってしまったと説明した。

しかし、兄がいなくなつたから土地が増えたとひそかに喜んでいた弟夫婦と甥っ子との生活は肩身が狭かった。

しかし、竜宮城に戻ろうとは思わなかった。

人魚姫は心やさしく、いつも太郎に尽くしてくれるが、派手好きで金遣いが荒く、パラサイトシングルなので家事も母親やめしつかい押し付けていたため、連れて歩くには最高だが、家庭的な女性とは言い難かった。また、いくら自分をひきとどめておきたかったんだらうとしても、あれこれくだらないわがままにつきあわされるのか

と思ったり、独特の竜宮カルチャーになじまなければいけないのかと思うと、土地は返してもらえなくても自分なら漁師として生計を立てていけるようになるだろうし陸の上の生活のほうがいいように思えた。

太郎は自分はまだ若いんだし、まだ遊んでも男なら30歳ぐらいでも相手が見つかるはずだと考えた。

しかも太郎は村ではなかなかのイケメンとしてモテていたし、若くてかわいい子なら他にもいっぱいいるだろう。

それに水の上では竜宮城関係のものは誰も見てないんだし、サッカー仲間ぐらいなら本当の事をしゃべっても大丈夫だろうと思いい、サッカーの仲間に人魚姫に会ったことや、人魚姫がおわざわざ変身してまで太郎に会いに来たことなど自慢げに話した。

太郎は、うっかり人魚姫にしゃべったことがばれたとしても、人魚姫は箱入りのお嬢さんで、しかも俺にべったりほれてるんだから、ちよつと約束をやぶって話したぐらいでは太郎を見捨てないだろうと思っていた。

太郎は調子にのっていた。

サッカー仲間は逆玉にのりかけた太郎を大変うらやましがった。

太郎の事をうらやましい太郎とあだ名で呼んだりした。

また、サッカー仲間は自分もかわいい人魚にちやほやされたいと思いい、海辺でサッカーしたり毎朝釣りに行くようになった。

あまりに朝に魚たちが大量に釣られていくので、竜宮王はこれを不思議がつて部下に調べさせると、太郎がしゃべったことが伝わってきた。

人魚姫はむかついて、太郎がもどつて来たら「約束をやぶったわね！」と小言のひつつでもと言ってやろうと思っていた。

そして、1か月後の約束の日、人魚姫はカメになって陸に上がった。しかし太郎は来ない。それでも人魚姫は、もう約束をやぶったかどうかなんてどうでもいいから帰ってきてほしいと思いい、その次の新月の日にも陸に上がった。

しかし太郎は現れなかつた。

人魚姫はそれでも3年間毎月新月の日にはカメになっては陸に上がって太郎の帰りを待った。

しかし、太郎は来ない。

つにカメ変身特製用キャンデーは残り5つになってしまい人魚姫はあせった。

人魚姫は太郎を恋しがってあちこち巨大なカメの姿で砂浜を歩き回ってしまった。

村人にばれないように新月の日を選んだのに砂浜にくつきりとでこぼこの跡が残ってしまった。

かなり大きなカメが歩き回った後は化け物が現れたかのようにであったため、村人は気味悪がった。

太郎は砂浜に化け物が出る、といううわさが流れた。

これを聞いて、これは人魚姫だとすぐに分かった。

太郎は化け物扱いされている大きなカメを捕獲したら自慢できるだろうし、村人や弟も俺を行方不明になったのに帰ってきてきて漁師としてはまだ見習いではとしない自分をヒーロー扱いしてくれるだろうと考えた。

太郎は村人に、俺が退治してやるから安心しろ、俺は無人島で生き延びた強い男だから化け物なんて平気だと言って回った。

太郎は、その次の新月カメになった人魚姫に近づいた。

太郎は、「待たせて悪かったな、家でいろいろもめたんだ。お詫びにこれを食べてくれ。」とカメになった人魚姫にささやいた。

そしてこっそり盗んでおいたねずみ退治用の毒のお団子に自分で殺虫剤のスプレーをかけて、睡眠薬をねじ込んで毒を強力にしたものをカメに食べさせた。

団子は巨大なカメを死に至らせるほどの毒をもっていなかったが、カメの手足を強くしびれさせた。

カメとして泳ぐことに慣れていない人魚姫は、睡魔に襲われてもがき苦しんでいるうちに竜宮城への秘密のルートからかなり外れてし

まい、広い太平洋で迷子になってしまった。

このため、人魚姫はその後の一生をカメとして、実家へのルートを探し泳ぎ回るはめになった。

その後の太郎はといえば、地上で新しく年下の若い女子と付き合うようになり、その彼女に結婚のプロポーズをしようと思い、その時に玉手箱をプレゼントすることにした。

プロポーズには夕方の太陽が海に沈むロマンチックな時間帯をえらんだ。太郎は新しい彼女に、「俺と結婚してくれ、これはおれの宝物だがおまえにやる」と言つて玉手箱を手渡した。

玉手箱をあけてみると白い煙がもこもたと出てきた。いい匂いだったが、けむりを吸うとボーっとした気分になった。

玉手箱の中には太郎が人魚姫と楽しそうにお酒を飲んで竜宮ランドでいちゃいちゃしている様子の写った写真が入っていた。

彼女は太郎のデリカシーのなさに激怒した。けむりで気分が悪かったので、普段はおとなしいタイプの女性だったがぶちっとキレてかんかんになって太郎をにらんだ。

太郎はあわてたが箱の中に竜宮ランドの名物の酒が入っていることに気がついた。

太郎は彼女に機嫌を直してもらおうと思い、その酒を彼女と飲んだ。しかし、酒は年を取らせて竜宮城の記憶を消す毒入りの酒だった。

竜宮界では竜宮城に招き入れた人間にはこの酒を手渡さなければならぬ法律が定められていたのだった。

彼女は一口飲んだだけだったので1歳年をとったのと、強烈に酔っぱらったので写真を見たことを忘れただけですんだ。

しかし、太郎はかなりおっさんになってしまい、人魚姫の事も忘れてしまった。

彼女は老けた太郎を見てびっくりしてにげてしまった。

太郎は何事かとおもって鏡をみると自分が定年後のサラリーマンのように老けていることに気がついた。

これでは生きていてもつまらない、。。。

太郎は仕方なく山に登り、まるで鶴のようにひっそりと暮らし、村人が近付くと鶴のように飛ぶように逃げ、また夜は鶴のように悲しい鳴き声でないた。

その声があまりにうらめしそうだったので、太郎とサッカーをしていた仲間は太郎の事を恨めしい太郎と呼ぶようになった。

それがやがて変化し、うらしま太郎が竜宮城に行き、かえったら鶴になった話にしてしまった。カメと出会うのは海辺なので島の浦の話なんだろうということになってしまった。

一方、竜宮城では竜宮王が東の海を危険地域とし認定し、今後陸上での活動は西洋中心に行くことになった。

西洋では人魚姫の話が今でも残っているが、それは日本は島国であり村社会であるのでうっかり話が広まったらもみ消しが困難だと認定したためである。

西欧や地中海では海賊が多くいたため、人間を調査するときはわざわざ危険を冒して砂浜に近づかなくとも、海賊を調査するほうがつとりばやかかった。

海賊に目撃されたとしても、海賊という人種は酒が好きなので記憶をもみけしやすかった。

また、「人魚をみた」と海賊が陸の上で話しても、長い船旅で女が恋しかったので人魚がいるかのような幻想を見たのだろうと笑い話になったぐらいだった。

こうして一つの恋の物語は、西と東に分かれ、人魚姫と浦島太郎になった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1032/>

---

新浦島太郎と人魚姫

2011年1月16日08時55分発行